

PL学園における3年ごとの追跡研究 (小児期からの成人病予防に関する研究)

岡田伸太郎¹⁾、田尻 仁¹⁾、原田徳蔵²⁾、加藤伴親³⁾

- 1)大阪大学医学部小児科
- 2)大阪大学医学部保健学科
- 3)PL病院小児科

A 研究目的：

小児期の生活習慣や肥満・高脂血症・高血圧などの危険因子について、同一小児を定期的に調査することで、生活習慣と危険因子の関連、各危険因子のトラッキングの有無やその程度を調査することが目的である。

B 研究方法：

平成3年からPL学園の小学1・4年生、中学1年生を対象に毎年コホート調査を行い、生活習慣アンケート、身体測定(身長、体重、皮下脂肪厚、体脂肪率、血圧)および血清脂質(総コレステロール、中性脂肪、HDLコレステロール)を測定した。今年度の対象者は小学1年生18名(男子8名、女子10名)、小学4年生37名(男子23名、女子14名)、中学1年生109名(男子62名、女子47名)であった。中学1年生は3年前の小学4年生時の測定値との相関を検討した。また中学1年生では β 3-アドレナリン受容体変異の有無と肥満および血清脂質との関連を検討した。

C 結果と考察

肥満は小4男子と中1女子で10%を越えていた。中1女子の増加は生理的ともいえるが、小4男子で肥満児の増加傾向が毎年みられた。一方高コレステロール血症は小学1年

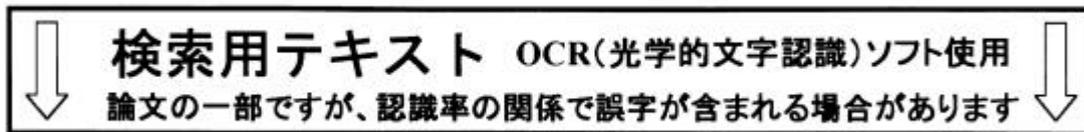
生から高頻度にみられ、いずれの年齢においても女子の方が高い頻度で認められた。3年間(小4→中1)でのトラッキングの検討では、肥満度、皮脂厚、体脂肪率、最大血圧、T-Cho、LDL-Cho、HDL-Choで有意の相関がみられ、パーセンタイルで5群に分類したトラッキング図でみても、これらの指標では明らかなトラッキングがみられた。

平成9、10年度の2年間で β 3-アドレナリン受容体変異の有無を中学1年生の計221名を対象に検査し、変異の有無による肥満度・皮脂厚・体脂肪率・最大血圧・血清脂質(総コレステロール、HDL-C)について検討した。その結果、変異の頻度は男女合わせて30.8%であり、HDL-Cが変異群において有意に低値を示したが、それ以外のすべての指標においては変異の有無による統計学的有意差はみられなかった。また肥満児と非肥満児における変異の頻度にも差がみられなかった。

過去7年間のコホート調査から、小児の肥満の増加傾向と高コレステロール血症の頻度の増加が確認された。さらに小児期においても、動脈硬化症の危険因子といわれる肥満・高脂血症・高血圧のすべてにおいてトラッキングがみられることが明らかとなった。また、 β 3-アドレナリン受容体変異の検討から小児の肥満は遺伝的要因よりも環境的要因の方がより強く関与していることが示唆された。

D 結論：

PL学園における7年間のコホート調査からみて、生活習慣病の予防のためには小児期から望ましい生活習慣を身につけることの重要性があらためて強調される。



A. 研究目的:

小児期の生活習慣や肥満・高脂血症・高血圧などの危険因子について、同一小児を定期的に調査することで、生活習慣と危険因子の関連、各危険因子のトラッキングの有無やその程度を調査することが目的である。